The Journal of the Shimonoseki University of Fisheries 26 (3) 395 — 408 (1978)

モンテーニュにおける死観について*

家 永 道 生

Sur la conception de la mort chez Montaigne

par

Michio IENAGA

Il nous faudrait résoudre la question de la mort, puisque la mort est une des conditions humaines et qu'elle signifie au moins la fin de la vie ordinaire.

La conception de la mort chez Montaigne nous donnera beaucoup de suggestions, quoiqu'il a vécu, il y a quatre cents ans environ, à la Renaissance française.

Mais ses conceptions de la mort et ses attitudes pour la mort, elles se contredisent quelquefois. Dans cette étude j'essaierai de trouver un rapport entre elles en considérant l'évolution interne de Montaigne.

1. La conception de la mort dans la première période de la retraite.

Montaigne essaie de combattre la mort en imaginant tous ses visages. Elle lui est la pierre de touche et «le but» de la vie.

2. La conception de la mort dans la deuxième période de la retraite.

Montaigne se souvient de son expérience de l'évanouissement par la contusion si violente d'une chute de cheval. Il revient à cette expérience, où il apprend beaucoup de choses, par exemple : le sommeil ressemble à la mort ; n'ayant que le sens pralysé, le mourant ne sent pas de douleur ; on peut voir de si près la mort sans effroi et sans sentiment.

D'autre part, à cette période il trouve les conditions humaines, auxquelles il essaie de se conformer. Et il atteint à ce qu'il est.

En cette période il a l'idée solide sur la mort. La mort, comme la naissance, lui est la condition de la vie. Donc il pense qu'on doit entrer dans la mort «sans sentiment et sans frayeur» comme le temps de naître.

Et dans cette pèriode, par l'exercice d'entrer «stupidement» au sommeil regardé comme la mort, il a l'assurance qu'il peut entrer dans sa mort sans effroi.

3. La conception de la mort dans la dernière période de la retraite.

Montaigne peut bien comprendre le sens de la vie et de la mort. Maintenant la mort ne lui est pas «le but», mais «le bout» de la vie. Si nous avons su, dit-il, vivre constamment et tranquillement, nous saurons mourir de même. Il nous semble qu'il atteint maintenant le lieu où il se conforme vraiement à la vie qui a la mort comme sa condition.

On dit qu'il mourut en paix, virilement et docilement.

---

* 水産大学校研究業績 第817号、1977年11月21日受理.
Article reçu le 21 novembre 1977 et numéroté 817 par l'Université des Pêches de Shimonoseki.

は じ め に

死は人間の条件の一つであり，それが我々の通常の生活の終りである以上，人は必ず一度，死の問題に何らかの解答を見出さねばならないであろう。

モンテーニュは，今を隔たる，およそ400年の昔，フランス・ルネサンスの時代に生きた思想家であるが，現代に生きる我々にとっても，おそらく大きな意味をもつであろう死観を形成している。この論文の意図するところは，このモンテーニュの死観を，纒めて紹介する事にある。

しかし，モンテーニュの死観が真に確立するのは，彼の晩年である。そこに至るまでの間，死への態度は，彼の思想の他の諸面もそうであるように，変化を重ねる。当論文は，時に前後左右相矛盾するかに見える，これらの変化や諸態度を跡づけながら，彼の内面的発展を考慮することにより，そこに一つの纒まりを見出そうと試みるものである。このため，この論考の内容は，モンテーニュのエセェ執筆の時期に即しながら，死観の変遷にしたがって，次の三部分に分たれる。

1．隠棲初期の死観
2．隠棲中期の死観
3．隠棲末期の死観

以下，この順序にしたがって，彼の死観を明らかにしていこうと思う。

1．隠棲初期の死観(1)

モンテーニュ (Michel de Montaigne, 1533. 2. 28-1592. 9. 13) は，隠棲初期，即ち1572・3年頃，エセェの中に，ストア的な諸章を記しているが，そこには，この時期特有の死観や，死への態度がみられる。先ずそれらを見ていくことにしよう。

彼は，1572年頃に記したとみなされる，エセェI巻14章の中で，次のように記している。『我々は，物事それ自身によってではなく，物事について我々が持つ意見によって苦しめられている。なぜなら，人は一つの種類 (espece)*1に属し，多少の差は別として，理解し判断するために同様の器官 (pareils outils et instrumens)*2を備えているのに，世間の人々をみると，mal(悪，不幸)といわれる物事に易々と耐えたり (supporter aysement)*3，よろこんでそういう状態にとび込んだりする人達があるからである。

このようにして，mal が，それ自身の権威 (authorité)*4によって mal なのではなく，我々の想念 (fantasie〔=imagination〕)*5が，物事にそのような味 (goust)*6を与えているのだとすれば，我々にとって一層つらい方のために頑張るのは，ことのほか愚かである (nous sommes estrangement fols de nous bander pour le party qui nous est le plus ennuyeux)。*7 このように言うと，人は言うかもしれない。「あなたの考え方は，たしかに色々の物事に当てはまるだろう。しかし，douleur（痛み・苦痛）についてはどういうつもりか」と。そうだ確かに，痛みの場合は，想念が主役ではない。我々の感覚それ自身が判断者である。膚が鞭打たれているのに，くすぐられているのだと膚に思わせる訳にはいかない。

それに，死は瞬時の変化であり，死において，我々が主として恐ろしいと言うのは，普通その前にくる douleur である。それは丁度，貧乏も，それが我々に耐えさせる飢えや渇きや寒さから来る douleur 以外に，恐るべきものを持たないのと同様である。

だから，私は，douleur が，我々にとって最も悪い出来事 (le pire accident)*8だとされるのをうけがおう。

---

*1. I-14, p. 51(A). *2. Ibid., ibid.(A). *3. Ibid., ibid.(A). *4. Ibid., ibid.(A). *5. Ibid., p.50(A)
*6. Ibid., ibid.(A). *7. Ibid., p.50-51(A). *8. Ibid., p.56(A).

《しかし我々は，苦痛を無くすることは出来なくても，少なくとも，我慢によってこれを少なくすることはできる。それに，たとえ肉体は動揺しても，精神と理性はよい状態に保つことができる。Mais il est en nous, si non de l'*1aneantir, au moins de l'amoindrir par la patience*2, et quand bien*3 le corps s'en esmouveroit, de maintenir ce neantmoins*4 l'ame et la raison en bonne trampe.*5》*6

《敵は，我々が逃げるのをみると一層苛酷になるように，douleur も，我々がそれのもとで震えているのを見ると得意になる。douleur に抵抗するものには，douleur はとてもよい条件で屈伏するだろう。だから，是非とも，douleur に対抗しなければならない。Tout ainsi que l'ennemy se rend plus aigre à nostre fuite, aussi s'enorgueillit la douleur à nous voir trembler soubs elle. Elle se rendra de bien meilleure composition à qui luy fera teste. Il se faut opposer et bander contre.》*7』と。

こう記して，一般には，痛い・苦しいとされている事を，ものともしない人々の実例や，むしろすすんでそれらを求める人達の例を述べていく。つまり，《苦痛蔑視の例 exemples du mespris de la douleur》*8を物語る。

そして結局，次のように言う。《物事それ自身は，それほど苦しくも困難でもないのに，我々の弱さ無気力さが，物事をそうするのである。Les choses ne sont pas si douloreuses, ny difficiles d'elles mesmes : mais nostre foiblesse et lascheté les fait telles.》*9と。

したがって，エセェ I 巻 14 章を初版の形でみるならば，そこで言われていることは，次のようになるであろう：モンテーニュは，種々の悪のうち，苦痛を最悪のものとみて，これに積極的に対抗し，苦痛によって乱されない心と理性とを保持しようと言っている。

また，上記の言説の中から，モンテーニュの，死についての考えを纏めれば，次のようになるであろう：死は瞬時のことなのであるから，死において主として恐ろしいのは，通常その前に来る苦痛である。ところが苦痛は，それを受ける人の心構えによって，大きくも小さくもなる。弱い，無気力な態度を捨てて，苦痛をものともしないならば，死も，決して大したことではないのである，とモンテーニュは，死について思っていたのであろう。

尤も，エセェの筆をとり始めたこの頃の叙述の内容は，モンテーニュ自身も記している*10ように，習作的なものであって，考えの内容が相互に整合性を持っているようには思えないことがある。例えば，やはりこの 1572 年頃に記したとみなされる，エセェ I 巻 20 章では，死について次のように述べる。

『哲学するとは，死の用意をする (s'aprester)*11 ことに外ならない。なぜなら，研究 (estude)*12 や瞑想 (contemplation)*13 は，魂を，或る程度われわれの外に引き出し，身体とは別にこれを働かせるのであるが，こうしたことは，いわば死の学び (aprentissage)*14 であり，死と似たようなものであるからである。それに，世のあらゆる智恵 (sagesse)*15 や論考 (discours)*16 は結局，我々に死を少しも恐れさせないように学ばせるという，この点に帰着するからである。この点に帰着する理由を言えば，智恵や論考は，一様に，苦痛・貧困など，人生が免れ難い不幸を蔑視 (mespriser)*17せよと教える点では一致するものの，諸々の不幸への蔑視の気遣い (soing)*18では同じではない。諸々の不幸のすべてに誰もが出会う訳ではなく，たとえ出会っても最悪の場合 (au pis aller)*19，気に入れば，死によってそれらを終らせることができるが，死については，不可避的 (inevitable)*20なのである。』と。

このように述べられると，さきに 14 章でモンテーニュが死について述べたところを知っている我々は，驚かざるを得ないであろう。14 章では，死で最も恐ろしいのは通常その前駆をなす苦痛であると言われたのであるし，この 20 章では，逆に，そのような苦痛を含む不幸のすべてよりも，死こそが問題であるとされて

---

*1. Douleur. *2. Endurance. *3. Quand bien même. *4. Ce nonobstant. *5. État. *6. I-14, p.56(A). *7. Ibid., p.58(A). *8. Ibid., p.59(A). *9. Ibid., p.67(A). *10. Cf. I-8. *11. I-20, p.81(A). *12. Ibid., ibid.(A). *13. Ibid., ibid.(A). *14. Action d'apprendre. ibid., ibid.(A). *15. Ibid., ibid.(A). *16. Ibid., ibid.(A). *17. Ibid., p.83(A). *18. Ibid., ibid.(A). *19. Ibid., ibid.(A). *20. Ibid., ibid.(A).

いるからである。

けれども，習作期のモンテーニュのエセェは，あちらこちら，さ迷っているように見える。こののち次第に発展深化し，そして最後に到達される彼の死観を手懸りにすれば，死観形成の過程の最初の歩みは，14章と20章とのうちでは，20章の方に示されていると思われる。したがって，第20章の中でモンテーニュが述べるところに，更に耳を傾けることにしよう。

今しがた彼は，諸々の不幸のうちでも，死は必然的なものであり，また，よもやの場合，死によって他の不幸を終らせることができると述べたのであるが，更に彼は，次のように言う。

《したがって，もし死が我々を恐れさせるならば，死は絶え間のない苦しみの種となり，これは少しも軽減されえない。Et par consequent, si elle*1 nous faict peur, c'est un subject continuel de tourment, et qui ne se peut aucunement soulager.》*2と。それというのも，死はいつなん時われわれを襲うかわからないのであるから，その死に対して安心でないならば，我々は断頭台に坐らせられて，時々刻々死におびえているようなものだからである。

尤も，俗衆 (vulgaire)*3のやり方は，死についてなど全く考えないという生き方である。けれども，これで死が乗り切れると思うのは，ひどく愚かである。*4 もしも，彼らの家族や彼ら自身に死がやって来た時，彼らはどんなに取り乱すことか。*5 だから，《もっと早くから，死のために用意しなければならない。Il y*6 faut prouvoir*7 de meilleur heure》*8とモンテーニュは言う。

ではモンテーニュは，死のために，どのような用意をしようというのであろうか。彼は次のように述べる。『しっかりと足を踏まえて (de pied ferme)*9,「死」に耐える(soutenir)*10ことを，これと戦う(combattre)*11ことを学ぼう。我々に対する死の最大の強み (son plus grand advantage)*12である，それの異様さ(estrangeté)*13を取り除くために，死に慣れ親しもう (accoustumer, pratiquer)。*14 《何よりも屢々，死を念頭に置こう。いつも死を想いみよう。あらゆる様相の死を想いみよう。N'ayons rien si souvent en la teste que la mort. A tous instants representons la*15 à nostre imagination et en tous visages.》*16 』と。これはつまり，何かちょっとした怪我の時でも，馬が躓いた折でも，「さて，もしこれが死そのもの (la mort mesme)*17であったら？」と自らに問い，死に対して，緊張し堅固になろう (roidissons nous)*18ということなのである。

実際のところモンテーニュは，折にふれて，家から出かける時にも，「もしこのまま死んだら？」と思ってみ，女性を交えた遊びの場ですらも，ふとそのように思ってみる。*19 それは，《死についてほど，私がいつも思いをめぐらしてきたものはない。Il n'est rien dequoy je me soye des toujours plus entretenu que des imaginations de la mort.》*20といわれるほどである。

それにしても，モンテーニュがこのように度々，死を眼前に想い浮べてまで，死に対抗しようとしているのは何故であろうか。内心の根本的理由は何であろうか。それは，彼が，「死」を，自分の心境の試しと見做していたからであると思われる。彼は，やはりこの頃に記したとみなされる，エセェ第I巻19章に，次のように記している。《他のあらゆる場合には仮面があり得る。……諸々の災難が，我々の急所をまでは試さず，落ちついた顔付をいつも保ついとまを我々に与えることもあろう。がしかし，死と我々との間の，この最後の役を演じる時には，もはや見せかけはない。そこでは，明瞭に話さなければならない。壺の底にある，正確な，正味のものを見せなければならない。……我々の生涯の他のあらゆる行為が，この最後の行為で試金石にかけられねばならぬ理由がここにある。これは最も重要な日であり，他のあらゆる日々を裁く日である。……私は，私の研学の成果の試しを死に委ねる。私の言葉が口先だけのものか心から出たものか，死の時に

---

*1. La mort. *2. I-20, p.83(A). *3. Ibid., p.84(A). また，ここでは《俗衆》は非難されるが，のちには，こういう人達の方が淡々として死を受け入れるとして，見直される。(cf. 当論文 p. 404.)
*4. I-20, p.84(A). *5. Ibid., ibid.(A). *6. A elle : à la mort. *7. Pourvoir. *8. I-20, p.86(A).
*9. Ibid., ibid.(A). *10. Ibid., ibid.(A). *11. Ibid., ibid.(A). *12. Ibid., ibid.(A). *13. Ibid., ibid.(A).
*14. Ibid., ibid.(A). *15. La mort. *16. I-20, p.86(A). *17. Ibid., ibid.(A). *18. Ibid., ibid.(A).
*19. Ibid., p.87, 88(A). *20. Ibid., p.87(A).

わかるであろう。En tout le reste il y peut avoir du masque : . . . les accidens, ne nous essayant*1 pas jusques au vif, nous donnent loysir de maintenir tousjours nostre visage rassis.*2 Mais à ce dernier rolle de la mort et de nous, il n'y a plus que faindre,*3 il faut parler François, il faut montrer ce qu'il y a de bon et de net dans le fond du pot, . . . Voylà pourquoy se doivent à ce dernier traict toucher*4 et esprouver toutes les autres actions de nostre vie. C'est le maistre jour, c'est le jour juge de tous les autres : . . . Je remets à la mort l'essay du fruict de mes estudes. Nous verrons là si mes discours me partent de la bouche, ou du cœur.》*5と。つまり彼にとっては,《我々の一生の目標，それは死である。死は，我々が必然的に狙わざるを得ぬ目標である。Le but de nostre carriere, c'est la mort, c'est l'object necessaire de nostre visée.》。*6

このような訳であるから，モンテーニュは，他の人についても，その死がどのようなものであったかに，強い関心を寄せている。彼は言う。《人々の死についてほど，即ち，彼が死ぬ時に，どのようなことを言い，どのような顔付をし，どのような態度であったかということほど，私がすすんで聞こうとすることはない。歴史の中でも，私がこれほど注意深く注目するところはない。. . . n'est rien dequcy je m'informe si volontiers, que de la mort des hommes : quelle parole, quel visage, quelle contenance ils y ont eu ; ny endroit des histoires, que je remarque si attantifvement.》*7と。

以上によって，この当時モンテーニュが，なみなみならぬ関心を，「死」に抱いていたことが知られるであろう。このような関心は，こののちも，殆ど生涯にわたって続くのである。

ところで，この20章では，緊張によって，死に対抗しようという態度が特徴的であるが，とりわけ緊張した筆致で，この章の中には，次のようにも記されている。《折れ曲った物体は，重荷に耐える力がより少ない。我々の精神も同様である。この敵〔死〕の努力に対抗して，精神を起し立てなければならない。なぜなら，この敵を怖れている間は，精神が安らかであることは不可能であるのと同様に，もし精神がこの敵に対して心安らかであるならば，…精神は，自らのうちには，不安も苦しみも恐れも，ほんの少しの不快も住み得ないと誇ることができるからである。…精神は，…貧苦，恥辱，貧困，その他運命の与えるあらゆる損害の支配者となる。そうすることのできるものは，この優越を獲得しようではないか。ここにこそ，真実至上の自由がある。Le corps, courbé et plié, a moins de force à soustenir un fais ; aussi a nostre ame : il la faut dresser et eslever contre l'effort de cet adversaire.*8 Car, comme il est impossible qu'elle se mette en repos, pendant qu'elle le craint : si elle s'en asseure*9 aussi, elle se peut venter, . . . qu'il est impossible que l'inquietude, le tourment, la peur, non le moindre desplaisir*10 loge en elle, . . . Elle est renduë maistresse . . . de l'indigence, de la honte, de la pauvreté, et de toutes autres injures de fortune. Gaignons cet advantage qui pourra : c'est icy la vraye et souveraine liberté, . . . 》*11と。

隠棲初期の，モンテーニュの死観及び死への態度は，大略上記のようである。したがってそこから，次のように言うことができるであろう。

モンテーニュは，エセェ I 巻14章では，死に関して，その前に来る苦痛だけを問題にして，苦痛の中にあっても，苦痛をものともせず，心と理性を良い状態に保とうと言った。この章のストア的態度は，のちに述べるように，一つの結実を生むものの，死観に関して言うならば，この頃の彼の叙述は習作の域を出ない。死観についての，彼の内面的発展からみれば，むしろ，より一層重要である I 巻20章では，14章の内容に反して，苦痛を含むあらゆる不幸に決着がつくのは死によってであり，しかも，他の不幸にくらべて，死は，あらゆる人に必然的であるから，もし死への恐怖から自由になることができれば，人は，あらゆる不幸から自由になると言える。この真の自由を得るために，死に耐え，死と闘うことを学ぼう。死から，その最大の強みである異様さを取り除くために，絶えず死を想いみて，死に慣れよう。そのようにして，緊張することにより，死に対して強い心を持とう，というのである。また，このような態度の背後には，死の時こそ，彼の

---

*1. Éprouvant. *2. Calme. *3. Feindre. *4. Essayer à la pierre de touche *5. I–19, p.79–80(A).
*6. I–20, p.84(A). *7. Ibid., p.90(A). *8. La mort. *9. Se rassure contre cet adversaire.
*10. Pas même le moindre déplaisir. *11. I–20, p.91(A).

日頃の心境の真価が問われる時である，死は生涯の目的であると，彼がみなしていたことがあると考えられるのである。

ところで，このように，緊張し堅固になる (se raidir) ことによって，不幸に向って用意しょうという，モンテーニュのストア的態度は，エセェの中では一時的なものに過ぎない。この態度の延長上にあるのは，エセェ第Ⅰ巻39章で示される，自分以外のものへの執着から解脱するという事であるが，この解脱のみを彼に残して，他のストア的態度は消え失せてしまう。真にモンテーニュらしい在り方は，人間の全面を認めた上で，その人間にくつろごうとする在り方である。この在り方が，ストア的態度に代って，次第に形成されてくる。

いわば，モンテーニュにとっては，上記の死観も，一層人間本来の姿に根ざした死観へと，乗り超えられねばならない，一つの過程に過ぎなかった。生観と密接なかかわりを持った死観，そのような死観のないところで，ただ想念の上の死に親しんだとしても，そこから人は，どれだけの結実を得ることができるであろうか？

2．隠棲中期の死観

ここで隠棲中期というのは，隠棲初期（1572・3年頃）を過ぎた頃から，1588年のエセェ第四版発行の時[*1]までの時期を指す。

隠棲初期を過ぎて間もなく，モンテーニュは，自らの仮死の経験に立ち帰り，そこから死について多くのことを学び取る。他面，彼はこの中期に，彼自身の思想を形成する。そして，この思想の一部としての死観も，この時期に現われる。しかし，死観と死への態度との間には，微妙な食い違いが見出される。にもかかわらず，時にその喰い違いは乗り超えられる。以下，それらのことを，この順序にしたがって，一層くわしく見ていくことにしよう。

モンテーニュは，隠棲初期には，想念 (imagination) の上で，死に向って対抗的に近づこうと言ったのであるが，初期を過ぎると間もなく，[*2] 次のように述べる。《推理や教育に，我々はすすんで信を置きたがる。しかしこれらのほかに，経験によって，我々が連れてゆきたい状態まで精神を訓練し形成するのでなければ，推理や教育は，我々を行為にまでもたらすほど十分に強力ではない。Il est malaisé que le discours[*3] et l'instruction, encore que nostre creance s'y applique[*4] volontiers, soient assez puissantes pour nous acheminer jusques à l'action, si outre cela nous n'exerçons et formons nostre ame par experience au train[*5] auquel nous la voulons renger : 》[*6]と。ここでは，隠棲初期とちがって，《経験》によって，精神を鍛えなければ，実際行動の場合にどぎまぎしてしまうだろうというのである。では，死について，我々はどういう経験をすることができるのであろうか。

勿論われわれは，試みに，死の実際経験を持つことはできない。けれども，睡眠は，死の近くに行くことになるとモンテーニュは言う。《しかし，いくらかでも，死に馴染み，死を試す，何らかの方法があると，私には思われる。我々は，死の経験を持つことができる。完全な死の経験ではないとしても，少なくとも役立たぬのではないような，また，我々を一層強くし，一層しっかりさせるような，そのような死の経験をである。たとえ我々が死と一緒になることはできなくても，それに近づくことはできるし，それを認めることは

＊1．6月．cf. p.XXXVII　＊2．1573－4年頃(cf.p.370)．　＊3．Raisonnement．　＊4．Encore que nous y ajoutions foi．　＊5．Manière d'être．　＊6．II-6, p.370(A).

できる。また，その砦にまで達することはできなくても，少なくとも，その通路を通うことはできるであろう。人々が我々に，死に似たものがあるために，睡眠そのものを考察させるのも，理由がなくはないのである。Il me semble toutefois qu'il y a quelque façon de nous apprivoiser à elle*1 et de l'essayer aucunement.*2 Nous en pouvons avoir experience, sinon entiere et parfaicte, au moins telle, qu'elle ne soit pas inutile, et qui nous rende plus fortifiez et asseurez. Si nous ne la pouvons joindre, nous la pouvons approcher, nous la pouvons reconnoistre ; et, si nous ne donnons*3 jusques à son fort, au moins verrons nous et en prattiquerons*4 les advenuës. Ce n'est pas sans raison qu'on nous fait regarder à nostre sommeil mesme, pour la ressemblance qu'il a de la mort.》*5と。このようにして彼は，一応，睡眠が死に近いものであることを述べ，そのことを信じても居たと思われるが，実は，ここで彼が最も言いたいのは，事故等で持つ仮死が，死に最も近いということである。睡眠はむしろ，その，仮死の経験の一部をなすものだと思われる。

モンテーニュが考えるところの，死に対する仮死の経験の位置づけと，その経験談とを，次に聴いてみることにしよう。

《けれども，何かひどい事故によって気絶に陥り，すべての感覚を失ったことのある人々は，私の意見では，本当の，生のままの死の顔を見るということの，極く近くまで行ったのである。Mais ceux qui sont tombez par quelque violent accident en defaillance de cœur et qui y ont perdu tous sentimens, ceux là, à mon advis, ont estē bien pres de voir son*6 vray et naturel visage : 》*7 とモンテーニュは言って，瀕死の重傷による仮死は，死に極く近いものであるということを告げたのち，彼自身のそうした経験を物語る。

或る日のこと，*8 モンテーニュの身の上に，大変な椿事が出来する。彼はその日，彼の城館からほど遠からぬところまで，大した供も連れずに，馬に乗って，散歩に出かけ，帰路についていた。その時，駄馬に跨った，丈高い，強い家来が一人，一行の人々を追い抜きながら，全速力でやって来て，過って，馬上のモンテーニュに，駄馬もろとも飛びかかってきたのである。

モンテーニュの方は，そのような事情を知るいとまもなく，一瞬，踵のところに家来の馬を見，自分は死んだと思った (je . . . me tins pour mort)。*9 だが，その思いは余りに突然で，恐ろしさが生じるいとまなどなかった (ce pensement avoit estē si soudain que la peur n'eut pas loisir de s'y engendrer)。*10 そして彼は，ひどい打撃と共に遠くの地上に叩きつけられ，ベルトは千切れ，剣はふっとび，失神 (esvanouissement)*11 状態に陥ってしまう。彼は動きもせず，感覚もなく，切株同然になったのである。

困った家来達は，できる限りのやり方で，彼を生き返らせようとしたがうまくいかず，死んだものと思って，2 km ほど離れた彼の城館まで，腕で両方から彼を持って，運び始める。この途中，モンテーニュはやっと動き始め (commencer à se mouvoir)*12 る。彼はこの間，たっぷり 2 時間も，人事不省に陥っていた。

モンテーニュは，やっと息を吹き返した時の自分の状態を，こう記す。《私の生命は，もはや，私の唇の端にしか引っかかっていないように思われた。私は，生命を外に押し出すのを助けて，眼を閉じるように思われた。そして，私が弱まり，遠くへ行くままになるのを楽しんだ。それは，私の精神の表層を泳いでいるに過ぎない想念であった。それは，他のすべてと同じように，弱々しかった。けれども，本当のところ，そこには，不快感がないばかりか，眠りの中にすべり込むままになる人が感じる，あの心地よささえ混じっていた。Il me sembloit que ma vie ne me tenoit plus qu'au bout des lēvres : je fermois les yeux pour ayder, ce me sembloit, à la pousser hors, et prenois plaisir à m'alanguir et à me laisser aller. C'estoit une imagination qui ne faisoit que nager superficiellement en mon ame, aussi tendre et aussi foible que tout le reste, mais à la veritē non seulement exempte de desplaisir, ains meslée à cette douceur que sentent

---

*1. La mort. *2. L'expērimenter en quelque façon. *3. Atteignons. *4. Frēquenterons. *5. II-6, p.371-2(A). *6. De la mort. *7. II-6, p.372(A). *8. おそらく，1569年か70年の或る日 (cf. p.370, 373). *9. II-6, p.377(A). *10. Ibid., ibid.(A). *11. Ibid., p.373(A). *12. Ibid., 373(A).

ceux qui se laissent glisser au sommeil.》*1と。

この落馬の一件についてモンテーニュは，その初めから終りまでを，逐一述べている。家来が駄馬ごと飛びかかって来た一瞬の状景の記憶から，まだ混濁した意識がやっと戻り，やがて多量の血を吐き，続いて，身体の方々に痛みを感じ，そして通常の意識を持つまでのことを，こと細かに述べている。とりわけ，その間の印象や思いや気分を，それらのニュアンスに忠実に記そうとしていることがうかがわれる。その文章からは，体験の実在から来る，活き活きとした重味が感じられる。

そしてモンテーニュは，この経験や，それについての種々の考察を終るにあたって，次のように述べている。《この，極く取るに足りない話は，そこから私が，私の為に教訓を引き出したのでなかったら，とてもくだらないものである。というのも，本当のところ，私は，死に慣れるためには，死に隣り合うしかないと思っているのだ。さて，…自らを仔細に観察する能力を持ってさえいれば，各人は，彼自身にとって非常によい研究材料である。Ce conte d'un évenement si legier est assez vain, n'estoit l'instruction que j'en ay tirée pour moy : car,à la veritē, pour s'aprivoiser à la mort, je trouve qu'il n'y a que de s'en avoisiner. Or, . . . , chacun est à soy-mesmes une très-bonne discipline;*2 pourveu qu'il ait la suffisance de s'espier de prēs.》*3と。このようにして，モンテーニュは，死に関しては，自分自身の経験へと立ち帰り，そこを基盤にして，こののち歩んでいったように思われる。

では彼は，この経験を見凝めて，死に関するどのようなことを学んだのであろうか。

その第一は，モンテーニュ自身度々言っているように，単に想念の上で色々な死を思いみて，それと対決するよりも，この仮死の経験を重んずべきだという事である。このことを彼は，例えばこうも述べている。《多くの物事が，実際よりも，想像によって一層大きく見える。Plusieurs choses nous semblent plus grandes par imagination que par effect.*4》*5と。

第二には，死の時には，苦しみなど無いということだと思われる。さきに引用した文章でも，《そこには，不快感がないばかりか，……心地よささえ混じっていた。》*6と記されていたが，このことは更に，死にかかった人には，通常の意識や十分な感覚は無く，はたで見て思うほどの苦痛は当人には無い*7という風に，繰り返し，述べられてもいる。*8

第三には，睡眠が，死と似たものを持っているという確信であると思われる。このことは，この章の初めにも言われた*9し，さきほどほどの引用文でも，《そこには，……眠りの中にすべりこむままになる人が感じる……》*10と言われた通りである。

第四には，まさに死の時に至っても，死が恐怖を呼ばないような，心の状態があり得るということであると思われる。その「心の状態」とは，さきに，「私は，自分が死んだと思った。しかし，その思いは余りに突然で，恐ろしさが生じるいとまはなかった*11」と言われたことから明らかであろう。

死観の，こののちの発展を考慮すると，モンテーニュは，おそらく，これらのことを仮死の経験から学んだように思われる。とりわけ，第四の，恐怖なしに（仮）死の中に入ったことがあるという経験は，こののちの死観形成に重要な意味を持っているように思われる。また，第三の，睡眠は死に似たものであるという判断は，単なる判断に止まらず，日常にも生かされていたように思われる。即ち，日々迎えられる睡眠において，眠りに入る時が，屢々，死への近づきとして試されていたように思われる。

ところで，モンテーニュは，この中期の1576～8年頃，フランス・ルネサンスの当時における彼なりの，総合的・哲学的反省をおこなう。そして，世界と人間とについての，彼の思想的枠組を形成する。これらは，1580年発行のエセェ初版（Ⅰ・Ⅱ巻）に示されている。彼はその後，人間としての自らを考察の対象にして，

---

*1. Ⅱ-6, p.374(A). *2. Sujet d'étude. *3. Ⅱ-6, p.377(A). *4. Par effect : en rēalitē. *5. Ⅱ-6, p.372(A). *6. 当論文p.401. *7. この判断が，あらゆる死者に当てはまると，我々は思うわけにはいかないであろうが，少なくともモンテニューは，こう確信したようである。 *8. Ⅱ-6, p.373-376(A).
*9. 当論文p.400-401. *10. 当論文p.401-402. *11. 当論文p.401.

自らを語り，自己自身を見出す。そして，その自らに即するように，努力を重ねる。その成果は，1588年に出されたエセェ第Ⅲ巻と，前のⅠ・Ⅱ巻への数多くの補筆によって示されている。これらの思想内容については，既に筆者は，他の若干の論文の中で述べた(2)ので，ここでは，そうした思想内容のうちの，当面必要な諸点を，次に要約的に記すにとどめたい。

モンテーニュが生きた16世紀フランスでは，カトリックが，国の正統な宗教であった。モンテーニュは，日常生活の隅々にまで浸透していたカトリックの儀式や祭式の上では，良きカトリック教徒であった。彼の生涯の殆どが，新旧両教徒の内乱の時代の中で過されたことを考慮すれば，彼の外面的在り方は，保守的とも見做すことができるであろう。しかし同時に，この在り方の根底には，打ち続く内乱によって，国家それ自身が崩壊してしまうのを防ごうとする，彼の社会的良心が働いていた。彼にとっては，どの宗教や宗派に人が属しているかということよりも，人間の存在の方が，より普遍的な，重要な事であったと思われる。

しかし，モンテーニュが，普遍的な人間愛に根ざす社会的良心のために，保守主義的な在り方をとったからといって，エセェに拠る限り，彼の内面までが，信仰に満ちていたわけではなかった。むしろ彼は，思想の実質的内容の上では，キリスト教から遠いところに立っていたと考えられる。霊魂永世の観念，原罪の意識，神への深い信仰，それらのどれもが，モンテーニュの内面に息づいていたとは考えられない。

むしろモンテーニュは，地上的な人間を，そのまま誠実に認める。彼によれば，人間は，全く精神的であることはできず，精神的であると同時に，肉体的ないしは肉的である。変化してやまない有限な存在である。同時にまた，彼にとって人間は，理性的かつ対象的に，不変の存在などを確信できぬところのものである。したがって彼は，死はその人の死滅であると言う。

モンテーニュは，人間を，このように，変化して止まない有限なものだと観るだけではなく，人間が拠る基盤はここにしかないと考える。人間が人間らしく在るためには，この人間に徹するべきであると言う。但し彼は，このような人間の条件は，自然が与えたものだと確信している。彼にとって「自然」は，われわれを含む万物と，その流動・変転・生滅そのものである。擬人的に言えば，自然が，それらを与えたのである。

さて，次に，この中期の死観について述べると，モンテーニュによれば，人間の死は，何ら特別のものではなく，万物が生滅するひと駒に過ぎない。エセェの言葉を引けば，次のようである。自然は我々に告げる。《あらゆるものが，お前達の動きをしないか。お前達と一緒に老いていかない何があるか。千の人間，千の動物，他の千の被造物が，お前達が死ぬその同じ瞬間に死ぬのだ。Tout ne branle-il pas vostre branle？ Y a-il chose qui ne vieillisse quant et*1 vous？ Mille hommes, mille animaux et mille autres creatures meurent en ce mesme instant que vous mourez：》*2(3)《お前の死は，宇宙の秩序の一部分である。Vostre mort est une des pieces de l'ordre de l'univers.》*3と。

そして，この死観にふさわしい，死への新たな心構えも示される。即ち，死は，単に生れる前の状態になることに過ぎないのだから，生れる時のように，無感情に，この世から出ていけと，モンテーニュは言う。《自然は言う。「ちょうどこの世へ入ったように，ここから出て行きなさい。感情なしに，恐怖なしに，あなたが死から生へとやった同じ通過を，生から死へとやりなおしなさい。Sortez, dit-elle,*4 de ce monde, comme vous y estes entrez. Le mesme passage que vous fites de la mort à la vie, sans passion*5 et sans frayeur, refaites le de la vie à la mort.》*6と。ここで言われている，生から死へと《感情なしに恐怖なしに》行くという事は，生と死との交替という事柄から導かれた単なる推理ではなく，そのような心の状態で，死に入ることができる筈だという，彼自身の経験的裏付を伴った発言であるだろう。なぜなら，既に落馬事件で見た*7ように，モンテーニュはあの時，自らの死を判断しながらも，そこで恐怖も持たず，またおそらく，何の感情も持たなかったからである。

＊1. Avec.　＊2. I-20, p.95(A).　＊3. Ibid., p.92(A).　＊4. La nature.　＊5. Sentiment.　＊6. I-20, p.92(A).　＊7. 当論文 p.401.

ところで，この中期におけるモンテーニュの死観が上に述べたようなものであるならば——即ち，死は，この世に生を受けたあらゆる存在の条件であり，死は，このような存在が，生れる以前の状態に帰るに過ぎない事なのであるから，生れた時のように，感情なしに，恐怖なしに通り過ぎられるべきものだとすれば——「死」に関して気遣わしいことは，既に無いのではあるまいか。このような死観が，心の底まで，よく覚悟されているならば，彼は死について思い悩むことは，もう無いのではあるまいか。

しかし，この中期のモンテーニュも，死を，彼自らがどのように受け入れるかについては，多くの気遣いをみせている。いわば，彼の死観と，実際の自らの死への態度との間には，微妙な喰い違いがみられる。彼はこの中期に，死の直前の心の在り方について，こう述べている。《死は常に一つであるのに，他の人々のもとにおいてよりも，村人や身分の低い人々に，はるかに一層多くのしっかりした態度が見出されるのは何故であろうか。死以上に我々をこわがらせるのは，人々が死をそれによって取り囲む，おそろしい顔付や，物々しい道具立の方であると，私は本当に思っている。elle estant tousjours une*1 qu'il*2 y ait toutesfois beaucoup plus d'asseurance*3 parmy les gens de village et de basse condition qu'ēs autres. Je croy ā la veritē que ce sont ces mines et appareils effroyables, dequoy nous l'entournons,*4 qui nous font plus de peur qu'elle*5》*6 (4) と。おそろしい顔付や物々しい道具立というのは，死にゆこうとする人の枕辺の，涙に暮れた，異様な有様を指している。陽の射さぬ部屋，叫び声を上げる妻子，青ざめ泣き濡れた召使い，ともされた大蠟燭，医者，説教師等がそれである。《つまり，我々の周りは，すべて恐怖と戦慄ばかりだ。somme, tout horreur et tout effroy autour de nous.》*7と彼は述べて，最後に，次のように言う。《このような供揃いの準備のいとまのない死は，何と幸福であろう。Heureuse la mort qui oste le loisir aux apprests de tel equipage.》*8と。いわば，モンテーニュもまた，身分の低い人々が，しっかりとした態度で迎えたその死を観ているのではあるが，彼にはまだ，自分の死の時に，周囲の状況によって取り乱しはしないかという不安が残っているように思われる。だから，彼は，次のようにも言う。《私は白状するが，旅行したとき，宿に着くと殆どいつも，ここで安心して病気になったり死んだりできるだろうかという思いが，私をよぎる。私は，私にうまく合った，物音のきこえない，汚なくない，煙くも息苦しくもないところに泊りたい。私は，こうしたつまらない周囲の状況によって，死にへつらおうとするのだ。よりよく言えば，ほかの重荷がなくても，おそらく十分に私に重みをかけてくるだろう死に注意を注ぎさえすればよいように，別の邪魔物から，すべて免れていたいのだ。……死は，生の大きな重要な部分である。だから私は，こののちも，それが過去を裏切らないように希望する。j'advoue qu'en voyageant je n'arrive gueres en logis où il ne me passe par la fantasie si j'y pourray estre et malade et mourant ā mon aise. Je veus estre logē en lieu qui me soit bien particulier,*9 sans bruict, non sale, ou fumeux, ou estouffē. Je cherche ā flatter la mort par ces frivoles circonstances, ou, pour mieux dire, ā me descharger de tout autre empeschement, affin que je n'aye qu'ā m'attendre*10 ā elle, qui me poisera volontiers*11 assez sans autre recharge. . . Ce*12 en*13 est un grand lopin, et d'importance, et espere meshuy*14 qu'il ne dementira pas le passē.》*15 と。

さて，モンテーニュは，このように，一方では，死観にそぐわない，死への気遣いを見せるのであるが，他方では，さきに述べたように，人間の条件に即するように努力する。即ち，変化する心，変化する身体，変化する健康の中で，それ以上であることも，それ以下であることも望まず，したがって，人間以外のものに支えを求めず，彼という人間自身の中にあって，自らの自然が欲するところを導き手としながら，心の平衡を求めようとする。

ところで，この努力は，どのような結実を生んだのであろうか。——尤も，この努力とその結果について

---

*1. La mort ētant toujours la mēme. *2. D'oū venait cela qu'il. *3. Fermetē. *4. Entourons.
*5. La mort. *6. I-20, p.96 (A). *7. Ibid., ibid. (A). *8. Ibid., ibid. (A). *9. Appropriē.
*10. Donner mon attention. *11. Pēsera probablement. *12. La mort. *13. De la vie.
*14. Dēsormais. *15. Ⅲ-9, p.983 (B).

は，筆者は，他の論文で考究した[2]ので，ここでは，その到達点を示すと考えられるエセェの一文だけを，ここに再び引用するに止めたい。モンテーニュは，次のように言う。《私の行為は，私がそれであるところのものに，そして私の条件に，規整され適合している。Mes actions[5] sont reglées et conformes à ce que je suis et à ma condition.》*1と。

そして一方では，やはり，死の修練を繰り返したように思われる。——それも，近くに，新旧両教徒間の内乱の嵐が吹くのを見聞きし，時にはその渦中にあり乍ら，修練を繰り返したように思われる。

《私が居る土地は，いつも，我々の内乱の襲撃の，最初にして最後の土地である。ここでは，平和がその完全な顔を見せたことは決してない。……私は屢々，いくらかの楽しみをもって，死の危険を，想像し待つことがある。私は，死を考えもせず認めもせず，愚鈍に，まっさかさまに死の中にとび込んでゆく。丁度，沈黙した暗い深みの中にとび込むように。するとこの深みは，ひといきに私を呑みこみ，一瞬のうちに，無味と無感覚に満ちた力強い眠りによって，私を圧倒する。そして，この短かく烈しい死の中に，私が予知した結論は，私に不安を生ずるよりも，むしろ慰めを与えてくれる。Le lieu où je me tiens est tousjours le premier et le dernier à la batterie*2 de nos troubles, et où la paix n'a jamais son visage entier, . . . Il m'advient souvant d'imaginer avec quelque plaisir les dangiers mortels et les attendre : je me plonge la teste baissée stupidement dans la mort, sans la considerer et recognoistre, comme dans une profondeur muette et obscure qui m'engloutit d'un saut et accable en un instant d'un puissant sommeil plein d'insipidité et indolence.*3 Et en ces morts courtes et violentes, la consequence que j'en prevoy me donne plus de consolation que l'effait de trouble.》*4と。

死の中へ入ってゆくこの試みは，落馬の折のように恐れることもなく，また，誕生の時のように無感情に，即ち《愚鈍に stupidement》，なされていることが知られる。言い直せば，それは，「無心に」ということであろう。またこの試みは，死に近いものとして，既に幾度か触れられたところの，「眠り」に入ることによってなされている。この引用文で示された死の試みの背後には，これまでモンテーニュが，死に関して獲得したものの集約が見出されると考えられる。

いわば，モンテーニュは，今や，無心に死の中へ入るものとして，無心に眠りの中に入っていると言うことができるであろう。そして，この死の試しは，死に対する何の不安もないという確信を，彼に与えているということができるであろう。

さて，以上の解釈が正しいとすれば，モンテーニュの，隠棲中期の死観に関しては，次のように言うことができるであろう。

隠棲初期のモンテーニュは，想念の中で死を想いみるという方法で死に近づき，そこで緊張し強固になろうとしたが，その頃にはまだ，明確な生観も，それに即した死観も形成されてはいなかった。それに対して中期では，死に頻した時の自分自身の経験に立ち帰って，そこから，死に恐怖感を持たずに接しうること，死は眠りに近いこと，死は苦しいものではないことを学ぶ。他面，この中期に，彼は自らの思想の枠組を形成する。それによれば，死は，この世のあらゆる生き物の条件である。人は，生れると同様，死ぬのである。だから，人はこの世に来た時と同様に去らねばならない。生れる時無心に生れて来たように，死ぬ時も無心に死ぬべきである。丁度，彼自身が仮死の状態に入った時のように。けれども，彼のこの死観通りに，いつも彼が，無感情に死の中に入っていけるという自信は，彼にはまだない。

彼の思想は，更に発展する。彼は，一方では有限で変化しつつある彼に，自らの自然を導き手としながら，即するように試みる。この道ゆきの中で彼は，自分自身に即して行為できるところまで到達する。そして他面，死の修練においても，彼は，死の試みとしての眠りの中に，無心に入っていくことができるようになる。以上のように，中期の死観を纏めることができると思われる。

しかし，それにしても，「死ぬことが，本当によく覚悟されている」ということは，人のどのような在り方

*1．Ⅲ-2, p.813 (B).　*2．Assaut.　*3．Insensibilité.　*4．Ⅲ-9, p.971 (B)

を指すのであろうか。生きながら，現在しない「死」にとらわれて，「死」を屢々試みるような，そのような在り方を指すのであろうか。隠棲末期のエセェには，中期よりも更に一歩を進めた死観が，示されているように思われる。

3．隠棲末期の死観

エセェの第四版が，1588年に出される。この版本の一つに，モンテーニュは多くの書き込みをする。この本は，書き込みを本文に挿入して，出版されるばかりになって，モンテーニュの死（1592年9月13日）後に残される。当論文では，この1588年から，92年の彼の死までを，隠棲末期と呼ぶ。

この隠棲末期において，モンテーニュは，人間における死の問題の解答を得たように思われる。彼は，次のように記している。

《もしも私達が生きることを知らなかったとしたならば，私達に死に方を教えて，生涯の終りにだけ違った姿を与えるのは正しくない。もし私達が，確信をもって，心安らかに生きることを知ったならば，同じように死ぬことを，私達は知るであろう。……私の意見では，死はまさしく生の端ではあるが，生の目的ではない。それは生の終りであり末端ではあるが，目標ではない。生は，生それ自身みずからで，生の目的でなければならない。生の目指すところでなければならない。生の正しい研究とは，生を整え，生を導き，生に耐えることである。生きることを知るという，この全体的で主要な章が含む数多くの義務の中に，この，いかに死ぬかを知るという項目も属してはいるが，我々の恐れが，それに重みを与えさえしなければ，それは極く些細な項目に属している。Si nous n'avons sçeu vivre, c'est injustice de nous apprendre à mourir, et de difformer*1 la fin de son tout. Si nous avons sçeu vivre constamment et tranquillement, nous sçaurons mourir de mesme...il m'est advis que c'est*2 bien le bout, non pourtant le but de la vie ; c'est sa fin, son extremité, non pourtant son object. Elle doit estre elle mesme à soy sa visée,*3 son dessein ; son droit estude est se regler, se conduire, se souffrir. Au nombre de plusieurs autres offices*4 que comprend ce general et principal chapitre de sçavoir vivre, est cet article de sçavoir mourir ; et des plus legiers si*5 nostre crainte ne luy donnoit poids.》*6 と。

ここに述べられている死観は，中期までのそれと，明らかに異なっている。「死」は，初期のように，一生の《目標》*7 でもなく，中期のように，《生の大きな重要な部分》*8 でもない。単に，生の《端》でしかない。けれども，よく考えてみれば，現在の自分の生は，死を条件として含んではいるものの，にもかかわらず生のただ中にあるのである。そこで，死にかかずらうならば，却って生は乱されるであろう。モンテーニュが述べるように，《生は，生それ自身みずからで，生の目的でなければならない》はずである。そして，死を条件としているこの生を，善く生きるものは，善く死ぬことができる筈である。この間の事情が，力強い筆致で述べられているこの文章は，（その背後に上述の研鑽のあることを想起すればなおのこと）モンテーニュが今や，あの生々とした彼の思想にとって，おそらく十全な，死観に到達していることを，はっきりと示していると言うことができるであろう。

＊1．Donner une forme différente.　＊2．La mort est.　＊3．But.　＊4．Devoirs.　＊5．Et il serait des plus légers si.　＊6．Ⅲ-12, p.1051-2 (C).　＊7．当論文 p.399.　＊8．当論文 p.404.

お わ り に

以上，隠棲初期から末期までの，モンテーニュの死観を跡づけてきた。死観は，エセェの中にある多くの主題のうちでも，最も烈しく，その内容が変転したものの一つであろうと思われる。けれども，上記のような解釈が可能であるとすれば，より前の死観の発展として，時には，否定的発展として，それぞれの死観が位置づけられるように思われる。

最後に，モンテーニュの実際の死について一言触れれば，彼は，自分の城館で，1592年9月13日に死んだ。その死は，安らかで，男らしいものであったと伝えられている[*1]。

註

(1) 当論文に用いた，エセェの原書及び略号等は，当研究報告20巻3号で既に記した通りであるが，念の為に，次にそれを再録する。

（i）引用原典：当論文に挙げる，*Essais* の原典箇所は，(イ)Pierre Villey, *Les Essais de Michel de Montaigne.* (l'édition reimprimée sous la direction de V.-L. Saulnier) (P. U. F., 1965) の頁数を示す。また，引用原文箇所として，"Ⅰ-3，p. 49" という風に記す場合，（上記原書は，元来の *Essais* Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ巻が纏められて一冊本となっているが）*Essais* の元来の第一巻第三章，上記原書の49頁めに，その原文が見出されることを示す。

なお，当論文作製において，絶えず参照した他の原典は，*Essais* の最も忠実な復刻本である(ロ) F. Strowski, *Les Essais de Michel de Montaigne.* (Bordeaux, Pech 1906-1920) である。その他参考にしたのは，(ハ) Maurice Rat, *Les Essais de Michel de Montaigne.* (Paris, Garnier, 1952) である。(ニ) Georges Gougenheim et P.-M. Schuhl, *Trois Essais de Montaigne.* (Paris, Vrin, 1951) も同様に参考にした。上記諸本における引用原文の相違については，重要なものはその都度註記した。

（ii）略号：上記の諸文献を次のように略記する。(イ) →Vil.，(ロ) →Bor.，(ハ) →Ra.，(ニ) →*Trois Essais.* 更に，(ロ)の第五巻めを成している *Lexique de la langue des Essais* (par P. Villey, 1933) の略号は，*Lex.* とする。

（iii）《　》：原文の忠実な引用を示す。

（iv）また，モンテーニュの用いている16世紀フランス語が，現代のそれと著しく異なる場合は，Vil., Ra., *Trois Essais* の註及び *Lex.* を用いて，現代フランス語の意味を註記した。orthographe が，現代のと余りに異なる時は，筆者が註記した。

（v）短い註は[*1, *2, *3]で各頁下欄に記し；長いものは(2)，(3)……で，このあとに記す。

なお，当論文で新たに付加した表示法は，次の一事である。

エセェの引用箇所の頁数のあとに，(A)または(B)あるいは(C)と記した。それは，モンテーニュ関係文献が通常そうであるように，Aによって1580年のエセェを，Bによって1588年の第四版で初めて現れたエセェ第Ⅲ巻およびⅠ・Ⅱ巻への補筆部分を，Cによって，これより後の補筆部分を示すためである。

(2) 拙論「モンテーニュにおける人間の条件」（実践女子大学文学部紀要，第12集所収）1969。

拙論「モンテーニュの自然についての試論」（その1）（広島哲学会誌「哲学」第15集所収）1963。同じく（その2）（同17集所収）。1965。

---

* 1. Cf. Friedrich (H.), *Montaigne* (traduit de l'allemand par R. Rovini), Gallimard, 1968, p. 315.

拙論「モンテーニュにおける反省」(澤瀉久敬編「フランスの哲学」第1巻所載) 東大出版, 1975。

(3) この引用文以下, p.403, 36行目までの引用文(これらをいま α 部分と名づける)は, 当論文第一章で隠棲初期のものとして扱ったところのI巻20章の, それもAに属する。したがって, α 部分を隠棲中期のものとして今扱うのは問題があることになるであろう。とりわけ, Armaingaud はα 部分を隠棲初期のものとしている*1から, 彼の判断とは合わないことになる。しかし筆者は, この20章の成立に関しては, Villeyの判断の方に与する。Villey は, 20章Aの中にも, 1578年以後の加筆があり, その加筆部分は, この章の後半(そこに α 部分も含まれる)であると考えている*2。

筆者が, Villey の判断に与したのは, α 部分が含まれる「自然の諭し」とも言い得る文章の基本的立場は, II巻12章(1576年—78年頃成立)の自然観と軌を一にするものであり, この自然観*3と, 当論文第1章で引いたような,「死を敵対視する」観点は相容れず, 後者の観点の超克の上に前者の自然観が成り立つと見なす方が, 筆者には妥当と考えられるからである。

(4) この引用文と, 当論文 p. 404, 19行目までの引用文は, 共にI巻20章A部分であるから, ここに引用すると, 註(3)の初めに記したのと同様の問題が生じることになる。しかし, 今引用している諸文章の原文は, 内容的に, 隠棲初期のものに反する(cf. 当論文 p. 398の＊3)し, Villey も, モンテーニュの読書の上から, この原文部分を1580年前頃のものと推定している。

(5) この引用文中の actions という語は, B版では, operations であった(cf. Bor.)。しかし, opération という語の用法が, モンテーニュの用いた意味では, おそらくすたれてきたので, 彼は屢々, C版では, この語を他の語に置き変えているという(cf. Lex.)。したがって, operations よりも actions の方が, モンテーニュの言わんとしたことを, よりよく表現しているのであろうと筆者は判断して, actions の方を引用文に記した。

＊1. Cf. A. Armaingaud, *Œvres complètes de Michel de Montaigne,* Paris, Louis Conard, 1924-1941; tome I p. 198-9.

＊2. Cf. P. Villey, *Les sources et l'évolution des Essais de Montaigne,* Paris, Hachette, 1908; tome I, p. 342.

＊3. Cf. II-12; 特に, p. 459-467.